

## 書評

# その手を放すな - 女が書いた土佐湾台風の記録集 -

「その手を放すな」出版委員会編, 関西膳写堂, 1973 年, 257p.

片岡 久美

「書かれてあるひとつひとつは、役所の報告書にも新聞の記事にも載らない、小さな出来事だが、それがほんとうの庶民の暮らしというものではないだろうか、と思う（「はじめに」より）」．この本は、発行代表者である古沢和子氏が、土佐湾台風（1970 年の 10 号台風のこと．高潮により高知市内に甚大な被害をもたらしたため、通称、土佐湾台風と呼ばれている）による被災体験の記録を残そうと、市内の女性たちに呼びかけ、自費出版により完成させた一冊である．内容は、古沢氏をはじめとする 60 人余りの女性たちの体験を綴ったものをまとめた形で編集されている．

本の構成は、「はじめに」の後、「老人・障害者・病人・妊婦」（十七編）、「母と子」（十四編）、「娘」（三編）、「妻・女・主婦」（二十四編）、「短歌」（三編）とカテゴリーに分けて、女性たちの体験が掲載されている．「あとがきにかえて」の後は、「解説篇」として、沢村武雄高知大学名誉教授による被害状況の記録によって締めくくられている．

この本の読み方は何通りも考えられる．まずは被災体験を知るための図書として読むことができる．古沢氏は素人の書き物と述べているが、文章は非常に読みやすく、一編一編、被災時の状況が目につかんでくる作品となっている．タイトルにもなった「その手を放すな！」という記録（刈谷伸子氏執筆）では、自宅が浸水した刈谷氏が、足の立たぬ姑を、水にゆらゆら浮かぶ畳の上に寄せ、励ましながら 5 時間も過ごした経験が綴られている．ふすまの敷居から手を放したら、畳がひっくり返り、溺れて死んでしまうかもしれない．そんな

な危機的状況や、救済されて人の温かさに胸が熱くなった時の気持ちや、手に取るように伝わってくる．刈谷氏の記録のタイトルに加えて、本の編集作りに参加した女性たちのつないだ手を放さないという願いのもと、『その手を放すな』というタイトルが決定されたそうだ．

代表発行人となった古沢氏の記録によると、命は助かっても思い出を含めすべての財産を失った喪失感は、非常に強いことがよく分かる．書かれているのが、ひとりの女性が体験した小さい出来事だからこそ、自分のことのように受け止めることができ、読む者にインパクトを与えるのかもしれない．

この本は、災害の記録としても大きな意味を持つ．政府や自治体がまとめている一般的な災害の記録は、被害人数や被害総額などの統計データが中心である（片岡 2003）．一方、この本には著者たちの居住地及び経験した被災状況という、通常は聞き取り調査などによって入手する必要がある情報が記録されている．このような情報は、ハザードマップと同じような役割を担うことが可能である．

この本のさらに興味深い点は、女性が書いたという点である（厳密には夫婦で書かれた記録が 1 編と沢村教授の原稿がある）．一般に女性は災害時には弱者となることが多い（住吉 2000）．さらに夫が仕事などに出かけており、子どもや老人を抱えて、孤立するケースもある．男性のみが書いた同様の作品にはこれまで出会ったことがないが、比較することができれば面白い．

筆者がこの本と出会ったのは、院生時代、2002年のことである。筆者の専門は気候学、当時の一番の関心は、台風経路や台風災害についてであった。履修していた授業の関係だろうか、お茶の水女子大学の図書館にて、ジェンダー関連の本が置かれた棚を見ていた際に、ふと「台風」という文字を見つけ、手に取ったのがこの本であった。つまりこの本は、お茶の水女子大学の図書館では、災害の図書ではなく、ジェンダー関連の図書として位置づけられていたことになる。

この本の発行代表者の古沢氏はどのような思いでこの本をまとめたのであろうか。筆者の中で素朴な疑問が湧いた。ウーマンリブ運動の影響を受け女性からの情報発信を行いたかったのか、自然災害において弱者である女性を前面に出すことで社会に何かを訴えたかったのか。古沢氏が女性に注目した理由を聞いてみたいと思った。

2003年9月、筆者は学会にて高知を訪れる機会があり、高知在住の古沢氏とお目にかかる機会を得た。この本を書くきっかけを教えてくださいという私からの質問に、思いもよらない答えが返ってきた。被災した際、古沢氏のご主人は、古沢氏が望まない場所に出かけていた。主人不在の家で、古沢氏は二人の子どもを抱えて、非常に大変な思いをした。被災後この本をまとめようと考えたのは、被災時、不在だったご主人への遠まわしの嫌味だったとのこと。

貴重な本の意外な出版のきっかけを聞き、女性による情報発信は増えているが、そのきっかけには様々なものがあるのだなと、興味を持った。帰宅して再び本を開いてみたら、古沢氏の記事の書

き出しに、「その日、夫は留守だったので、六つと七つの子どもを2段ベッドの上に上げ、濁水の中で私は孤軍奮闘した」との文章が目に入った。これはご主人に向けたメッセージだったのかと、失礼ながら微笑ましく感じた。

出版時、この本は非常に話題になり、古沢氏はNHK「こんにちは奥さん」への出演などもあったそうだ。しかしながら、時の流れと共に、この本の存在は忘れられつつある。書評というと、新刊を紹介する場合が一般的であるが、今号の特集に「ジェンダー」という語が入っていることもあり、女性の書いた災害記録を紹介させてもらうこととした。30年以上前に自費出版された図書のため、残念ながら入手することは難しいが、機会があれば図書館などで手にとって欲しい1冊である。

## 文 献

- 片岡久美・百田和加・田宮兵衛 2003. 高知県『災害記録』による台風災害と大雨災害の比較. 人間文化論叢 6: 187-198.
- 住吉ゆう子・宮野道雄 2000. 災害・事故による人的被害の性差に関する基礎的研究. 日本生理人類学会誌 5: 117-112.
- 「その手を放すな」出版委員会編 1973. 『その手を放すな 一女が書いた土佐湾台風の記録集』関西膳写堂.

---

かたおか・くみ  
第46回生  
秀明大学学校教師学部